

## 50. イスラムの美を求めて

長々と美とは無関係なことばかりの話を綴ってきましたが、一寸筆休めのような、私には全く似つかわしくない分野に入り込んでみましょうか、其れは美の世界です。誠に不思議な話ですが、私はデザイン関連の某高等専門学校で西洋美術史を担当しております。

長年中東や地中海東沿岸諸国をウロウロしておりますから、否応なしにイスラム・キリスト・ユダヤ教の世界に嵌り込み、それぞれの信者の人達と仕事を共にしているうち共感できるものやエッ！ドウシテ？と思うものやいろいろの思考が複合して、そのうち本格的に比較研究を重ねてみようと思ひ立ち、数多くの論文を書きまくり、なにしろ本場に生活しているのですから、毎日がフィールドワークみたいなもの、しかも三者の世界を行き来しましたから比較宗教は日常的に学ぶことができ、誠に恵まれた環境にあったわけで、更には業務以外の時間帯は海と砂漠を眺め



ている以外何もないアフターファイブは零の世界ですから時間は有り余っており、論文の草案を練っている時が最高の幸せ、生きていることが実感でき、しかもパソコンを活用しておりましたから資料も世界中から収集でき、世の中実に便利になったもんだと感謝しておりました。

砂漠 と書きますが、実は 沙漠 が本来の語であって、年間 10mm 以下の少雨の地域を沙漠と言うのであって 砂 でなければならぬ意味は全く無いのです。従ってゴツゴツした赤みを帯びた乾ききった岩肌の大地が広がっており草木は棘の塊のような茶色の草らしきもの生えている程度で荒涼とした風景が中東の沙漠です。だからこここに住む人々はモスクに安らぎと美しさを求めるのでしよう。

イスラム教が誕生したアラブは沙漠の世界であって、その中の狭い居住空間にあるとき、人間としての営みが自己の能力よりも自然の力と目に見えない何者かの力が働いているという認識は潜在的にあったのでしよう。

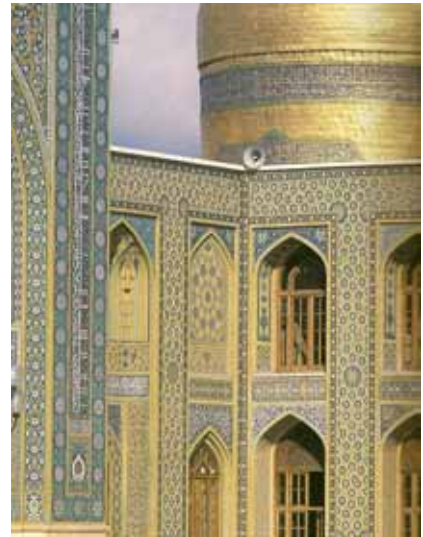
6世紀のアラビアに生まれたムハンマドは、神の啓示を受けた「警告者」として人々の前に現れ、「神の使徒」としてそれまでの信仰世界、社会体制を一変する革命を成し遂げ、これは精神の拠り所としての宗教の枠を超え、個人生活から社会制度に至る、あらゆる側面をカバーする教えであって、いわば全知万能の教えなのです。

従ってこの説を説いたムハンマドは「イスラムを説いた預言者」「イスラム教の教祖」として崇められておりありますが、しかし神格化されることはありません。何故なら、教えの主体は「神アッラ

ー」であり、ムハンマドは神の 御言葉 を預かり、仲介する「預言者」であって、「予言者」ではないのです。

ムハンマド が神の啓示を受け、僅か 20 年位の活動期間ですが、そこで残された啓示が「コーラン（聖典）」として、その言行が「ハディース（言行録）」として、そしてその両者から抽出された規範が「シャリーア（聖法）」として申し送られ、6 世紀から今日に至るイスラム世界を築きあげた規範として 活用されてきたのです。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教のいずれも唯一絶対神を信仰する一神教であり、この世界が唯一神によって創造されたときから神の教導が始まり、世界は 終末 最後の審判 永遠の来世へと向かっているのだという認識では一致しています。



ユダヤ教は、唯一神ヤハウェと「契約」という関係を結んだのはユダヤ人のみであるから、救われるのはユダヤ教徒のみと主張します。

これに対してキリスト教とイスラム教では、救済は特定の民族にかかわるものではなく万人に開かれたものとしております。しかし救済者はだれかという点になるとキリスト教とイスラム教では、その理解は根本的な相違があります。キリスト教では、神と人類の間に「神の子」としてイエスを立て、イエスを「救世主（メシア）」と位置づ、神を唯一の親として、神から生まれた子、従ってイエスはその本質において神であるとします。

イスラム教では、最もシンプルに絶対神そのものが救済者だとしています。これは世界万物と人類の創造者が唯一神であるとしていますから当然と理解します。

従ってイスラム教はアッラーを唯一神として信仰しますから偶像は絶対禁止です。これに対してキリスト教はキリストの像を偶像とはみなさず像そのものを神とみなしておりますから、根本的な理解の違いから啓典三宗教は互いに相手を否定しています。

更に啓典三宗教の聖地がエレサレムの旧市街地の「神殿の丘」狭い場所に隣り合わせであり、それぞれの信者が一箇所に集い隣り合わせで祈る不思議な光景が日常的にあります。

イエスが人類の原罪を背負うて十字架を背負って歩いた「悲しみの道（ヴィア・ドロローサ）」磔刑になり埋葬されたゴルゴダの丘、そして復活した聖地に聖墳墓教会があります。

ユダヤ教はユダ王国のエルサレム神殿がローマ帝国軍によって破壊され外壁の焼け残り部分が 嘆きの壁 として聖地となり、イスラム教はアッラーのお召し受けたムハンマドが天馬にのて天使ガブリエルの案内で一夜昇天した神殿上の岩が 岩のドーム としてハラム・アッシャリーフ（高貴な聖地）となっておりますから、アブラハムの三宗教が同一場所が聖地としておりその争いは激しく、妥協の余地が全くない宗教上の争いです。

それはまた十字軍時代から続く争いであり、今でも中東では戦火が絶えない悲劇の地域です。さら

に原油産出では世界のエネルギーを支配し、その利権争いがより一層闘いを激化させ解決困難な事態に陥っております。

さて表題の美術史に戻れば、街・村落人々が住むところには大小さまざまなモスク（礼拝堂）がありますが、その土地に合った実に美しい建築です。モスクの原型は立方体だったとされていますが、ドーム状に替わってきました。これは内部の礼拝のエネルギーが拡散、充満し、その流出するエネルギーの力学的総体がドームを隆起させるなどして、自然に外観が形成されたのだと説明しております。



す。イスラムの芸術性は根源への還帰よりも、展開していく実在の美しさに意味があります。

ドームを支えるのは数と幾何学の組み合わせであり、イスラム科学全般の根源は数と幾何学の組み合わせで、これが占星術に繋がり建築に繋がっているのです。「数とは、一性がその反復により人間の魂の中にもたらす精神的形象である」としています。

このイスラム建築の典型は、トルコのスレイマニエ・モスク、インドのタージ・マハル、スペインのアルハンブラ宮殿がその代表的なモスクです。

モスクの中を覗いてみましょう。偶像は絶対否定ですから内部には偶像やその他の装飾は一つ切ありません。

モスクは五行のうちの礼拝(サラート)を行うところですからモスクの造りは聖地メッカの方角(キブラと言います)を指し、ホールの先端の壁にミフラブ(礼拝を向ける地・メッカの方向を示す壁龕)と呼ばれる窪みがあるだけで祭壇は何もありません。ミフラブの右脇がイマーム(導師)が集団礼拝の際に説教する壇があるだけです。その他の施設としては礼拝を行う前に身体を清める泉があるだけで全くの空間です。

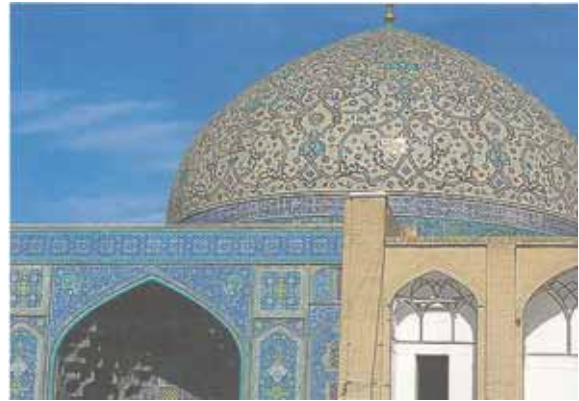
何もない空間だけのホールですが、これが見るものを幻惑するような幾何学的構造とアラベスク文様が強烈な印象です。造形的表現は絶対否定ですから、幾何文様、植物文様、文字文様などが著しく発達し、そして色彩美です。淡い青を基調とした色彩が幻想の世界に誘い込むような見事な文様がドームの天井、壁、床、全てを包んでおりあります。

アラベスクとは、唐草模様のことで植物の葉をかたどった幾何学装飾模様で、偶像否定のイスラム教義は徹底的に具象化を排除した結果としてアラビア文字の図案化したアラベスク模様が発達して文字から植物、紐といった幾何学模様が発達したのです。

特にミフラブに刻印されたアラビア文字と植物文様の精緻を極めたその浮彫りには息を呑む思いで、サファンビー朝時代における美意識の高さにただ感激するだけです。

床は模様が描かれたタイルが幾何学的に見事に敷き詰められ、サラートの時には床の模様に従って並びますから見事に列ができあがり、一糸乱れぬ見事なサラートが行われます。モスクでのサラートは、コーランの朗読にあわせて祈ります。

礼拝の型は決まっており、ミフラーブへ向いて立ち、立ったまま両手を開いて耳の高さにあげ「アッラーフ・アクバル（神は偉大なり）」と神を称える祈りの動作から、最後に「神の平安と恩恵が汝らの上にあれ」と唱えながら、首を右に振り、次に左に振って、礼拝の1単位が終わりますが、この間唱える祈りの言葉が決まっており、細かな動作の規定があります。礼拝の1単位をラクアと言います。この



ラクアは夜明けが2ラクア、正午と午後、夜半が4ラクア、日没が3ラクアで1日5回必ず神を礼拝する義務があります。

モスクでのサラートは正午・午後ですから4ラクア行います。夜明け、夜半は自宅ですが、昼は職場かモスクで行いますが、神への服従と感謝の心は、必ず形にして表わさなければなりません。五行の一つが礼拝ですからどのような状態にあっても最優先事項としてサラートが行われます。ですから仕事中でも中断して礼拝ということになります。コーランの朗読はラジオで放送されており、夜明けから夜半までコーランの朗読だけを放送している専門の放送局があるのです。

しかし、イスラム教徒と異教徒とが協同作業でやる貨物船の荷役作業の様な場合はトラブルがしばしばありました。また安息日はユダヤ教、土曜日。キリスト教、日曜日。イスラム教、金曜日ですから、少しでも早く済ませたい荷役作業なのでステベ（荷役作業員）の配置表作成の組み合わせに頭を悩ませる毎日でした。

モスクの内部の美しさを述べてきましたが、尖塔とドームで飾られたモスクの外部からの見たその美しさを見ましょう。日中は強烈な太陽熱によって上昇流が激しく、乾ききった大地から土埃が舞い上がり、太陽が霞んで見える位の凄まじさですが、夕方になると気温が急激に下がり、浮遊している土埃は沈降し、雲もありませんから夕日の輝きは素晴らしいものがあります。沙漠に浮かぶ金色に輝くドームと尖塔のシルエットは息を呑む美しさです。

視覚の次は聴覚ですが、偶像崇拝を禁じているために、具象的なものよりも、抽象的なものの発展が促されたようです。しかし、正統的なイスラム教は音楽を認めず、その典礼は、神の言葉が十全に顕現されているアラビア語によるコーランの朗読、ないしは礼拝の時刻を告げる肉声による合図 アザーン 以外にはあり得ないからです。ですからコーランの朗読を純粹に発達させたのです。音曲を媒介に神と融合し、宇宙の象徴としての神聖音楽と神聖融合、大宇宙と小宇宙との照応のエコーをコーランの朗読に見出し、あるいはハルモニウムを弾きながら神秘詩を朗読するうち、聴衆は高揚感で高次意識への世界へ飛翔していく。コーランの朗読にはコンクールも開かれています。

中世のヨーロッパはいわゆる中世の暗黒時代であり、同じ時代中東はイスラム文化全盛時代で、科学面でもはるかにヨーロッパを凌駕しており、これらイスラムの文化、科学を少しずつ吸収しながら成長してき、遂にイスラム世界、中東を凌ぐようになったのは、大航海時代を経て中南米、カリブからの金銀財宝の収奪により財政的に豊になり、そして産業革命によって一挙に抜き去り、力を得てからは牙をむきだして中東を征服、植民地化してしていく過程の一部は アラビアのロレンス が映像化しております。

私が中東に駐在していたときの事務所はイラクのバスラでしたが、テリトリーはイスラム圏全般でアフリカのギニア湾沿岸諸国が含まれていましたので、東奔西走の活躍と言いたいのですが実はドタバタ、ウロウロしていたにすぎませんが、ただ同じイスラムであってもモスクが国、民族によってその建築様式が少しずつ異なっており、美的センスも異なり、教義の解釈にも微妙な違いがあって、気候風土が異なれば生活様式も違いますから当然の帰結でしょう。ウロウロしていたおかげで多くの国、地方でイスラムを観ることができ、比較できるくらい見聞を広げられたのは幸いでした。

ひとつ残念だったことはイラクに居住しながらイラク国内を自由に動くことは全面禁止、なにしろ悪名高き独裁者フセインの時代でしたから、常にどこかで反乱、紛争、弾圧の連続で国内は常に緊張状態、自由に旅行するなんて夢物語で、移動は街内と港とエアポートだけでした。ですからメソポタミア文明発祥の地の文化遺産の宝庫、遺跡群を観ることができませんでした。数多くの文化遺産がありながらイラクの世界遺産はパルティア王国が築いた ハトラ がただ一つだけ登録されているにすぎませんから本当に残念です。

イランも自由には行動できなかつたのですが、それでも首都テヘランからバスで約7時間かけてイラン高原のほぼ中央に位置するイランを代表するモスクと宮殿にペルシャの面影が宿る イスファハン を訪れることができたことは最高の収穫でした。

16世紀初頭、イスラム教シーア派であるサファヴィー朝がイラン全土を制圧し、1598年首都をイスファハンに遷し、壮大なスケールの都市建設に着手、まず南北に伸びる イマーム広場 を造営し、この広場を中心にして首都の主な建造物を数十年をかけて王宮、宮殿、儀式会場、競技場、大門等を建造したのですから素晴らしい建築物です。その中で代表とするものは広場の南側に位置する壮大で華麗なイマーム・モスクで、其の入り口は瑠璃色に輝く彩釉 タイル で被われイーワーンのミナレット(尖塔)からなっております。イーワーン天井には、鐘乳石を模した複雑な装飾が施されており、その細緻さの技巧に圧倒されます。更に進むと右方向に45°に折れて中庭に出ると泉があり、その先がドームを戴く主礼拝室になるモスクで、祈りを捧げるメッカの方向(ギブラ)が南西方向になるため45度に折れる必要があったのです。この礼拝室も彩釉タイルで被われ、唐草模様のアラベスクやコーランの章句に充たされているのです。まさに来世(アーヒラ)理想の楽園郷を現出しているのでしょう。

その他のアリー・カプー宮殿、チエヘル・ソトゥーン宮殿、ジャメ・モスク、歴史、宗教、建築、美術をそれぞれの眼で見ると興味尽きないものがあり、専門知識がないのが悔やまれましたが、素人

の私でもただ圧倒される迫力のある史跡でした。

どうしてもこの地を訪れたかったもう一つの理由はイラン高原を走行してみたいという願望があったからです。話は大部遡りますが満州事変の立て役者、(前 49 関東軍で述べた石原莞爾氏)関東軍高級参謀石原莞爾中佐(当時)は大変な策士であり、陸士、陸大と恩賜の軍刀拝領の秀才参謀ですが、この人が「世界最終戦論」というタイトルの論文を書いており、陸軍軍人の愛読書のひとつです。石原氏は大尉時代ドイツで研修をしており、その際デルブリュックの戦争観の影響による独自の戦争観を構築したようです。



其の内容は世界戦争の仮説ですが、ヨーロッパの覇者はドイツ(この論文が書かれたのはヒットラーが出現する前です)。アジアの覇者は日米戦争に勝った日本で、其の二国が世界制覇をかけて戦うのが世界最終戦論で、其の戦争に勝った日本が世界の平和を導くという内容で、SF かアニメの世界でその論の瑕疵はいくらでも挙げることができますが、当時は陸軍の高級参謀の間では理想として真面目に議論されていたのですから啞然とします。

その世界制覇を懸けた日独戦の最期の会戦がどうゆう訳か、このイラン高原だと石原参謀は書いてあります。ザグロス山脈の東側に広がる標高 1300m のイラン高原は古代から東西を結ぶ交易要路として、要衝として幾多の争奪が繰り返されてきた地域である事は歴史が証明しており、この高原のほぼ中央にありザーヤン川の沿岸にあるオアシス都市が「イスファハン」で、イスファハンの意味はペルシャ語で「軍隊の駐屯する場所」の意です。

余計な話ですが果物のザクロ(石榴)はイラン高原が原産で、ザグロス山脈のザグロス地方からきているようです。

さて石原参謀がこのイラン高原を世界最終戦の決戦場として選んだ理由は何なのか解りませんが、嘗てのシルクロードはこのイラン高原が東西の要路となっておりました。ジンギスカン率いる蒙古の大軍も同じルートを進撃しておりますから、それを念頭において、ヨーロッパ制覇を目指す我が帝国陸軍の精鋭の進撃路として中央アジアを經由してイラン高原に達し、ここでドイツの大部隊との世紀の大決戦に臨むというシナリを書いたのでしょうか、これはジンギスカンの遠征と日露戦争の奉天大会戦をゴッチャにした発想で、この論には海軍の存在は全く念頭にありませんから、陸軍軍人の発想が良く分かります。

この最終戦論は関東大震災の後の頃で講演会場で論じられ、その後本に纏められ出版されました。この論によると関東大震災で崩壊した帝都を復興する必要はない、復興に必要な予算 10 億円は軍備に投じて対米戦に備えろという主旨で、世界最終戦に勝利してから世界中から資金を集めて理想的な帝都を建設するとする青写真ですから聴衆は驚いたようです。しかしこの奇想天外な論に個人的にもマスコミも反論がなかったようです。そしてご丁寧にもこのイラン高原の兵站地誌、地図までも作製していた参謀がいたのですから想像力旺盛な人達であったことには感心します。

その後ヒットラーが出現すると書き直されて、ヒットラー・ドイツがヨーロッパを統一し、ヒットラーが盟主となったヨーロッパ連合と、南北連合のアメリカが戦い、これに勝利するのはアメリカ連合軍で、やがて天皇を中心とした東亜連盟とアメリカ連合が戦い、勝利した東亜連盟が世界の平和を創世し、その中心は現人神・天皇である。と書き直され、昭和15年9月 新「世界最終戦論」が刊行、その内容は相当期間の戦争準備期間を要し、満州・中国を兵站基地とするとして具体的な計画が盛り込まれていますが、その頃石原氏は中将を最高位として退役、予備役になり、49話で述べたように民間人として立命館大



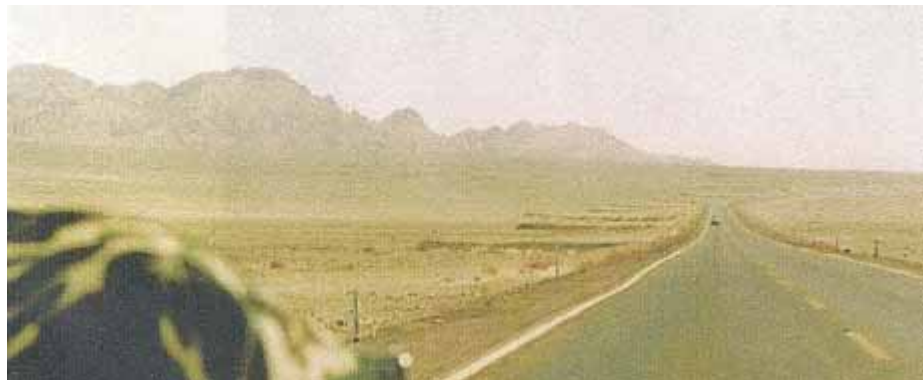
教授に就任、翌年の昭和16年犬猿の仲であった東條大将(首相)が対米戦に突入してしまい、「東條上等兵」が準備もないまま対米戦を開戦してしまったことを悔やんでいたようです。

私はイランの首都テヘランの空港に降り立ち、早速バスターミナルへ行き、イスファハン行きの急行バスを予約、約330km、途中ゴム市での休憩をいれて所要時間約7時間、イラン高原のハイウェーを疾走するの



ですが赤茶けた不毛の大地で、たまにオアシスの様な緑がある所や川があり、ところどころ集落がありました。しかし疾走するバスの窓外に広がるイラン高原が何故に日独決戦の戦場になるのか、シルクロードを再現するような補給路をどうやって確保するのか、昭和初期で未だ単発ペラ機しかなかった時代ですが、石原参謀の想定では四発大型輸送機や爆撃機を多用すると書いており、単なる夢を描いたのか、空想の世界なのか、近未来軍事構想として書いたのかその真意は判りません。

しかも石原参謀自身はイラン高原には一度も行ってないようですから、全てがヴァチャルの世界です。イラン高原が東西交通の要路だったことは理解できますが、この不



毛の大地を何を指して蒙古の大軍が進撃していったのか、まして帝国陸軍がこの大地で世紀の大会戦をする必要がどこにあるのか、現職高級参謀の考えはさっぱり判りませんでした。

それを半世紀以上経ってワザワザ検証しに出かけて行った物好きがいようとは、我ながらアホだと自覚はしております。

## 写真・絵

イスファハン（イラン）、マスジット・イ・シャ（王のモスク）入り口。半円球状に凹んだイーワーンに立つと鍾乳石を模した見事な飾りが垂れ下がり壁面は手の込んだモザイクタイルで埋め尽くされ、青を主体とした色鮮やかさは息を呑む思いです。

### マシュハドのイマーム・レザーの聖廟（イラン）

の入り口を下から見上げた神秘的な紋様、青を主体とした色彩は、空と水を表現し乾燥地帯には対照的な色彩で水への渴望を表現しています。

モスクの屋根には必ず美しく装飾されたドームになっており、夕日に映えるドームの輝きは神の世界を感じさせます。ドームには半球型（地中海、初期ペルシャ）、砲弾型（エジプト、マムルーク朝）、ドングリ型（ティムール朝）、宝珠型（インド・ムガル朝）がありますが、このドームは胴部が膨らみやくびれた玉葱型で青を主体とした繊細美しいモザイクタイル紋様です。コーランには「信仰を抱き、かつ善行をなす人々に向かっては喜びの音信を知らせてやるがよい。彼等はやがて滔々と川水が流れる緑の園へ赴くであろう」記されており、水を渴望する沙漠の民にとって、青は水を象徴する色彩です。モスクの中庭には必ず美しい泉が造られており、アーヒラ（来世）の世界を模しています。

「世界最終戦論」初版、裏返しでコピーしたわけではありません、昭和初期頃 横書きは右から左へと書いておりました。論は講演会での原稿を纏めたモノです。

「世界最終戦論」重版、この版が出た頃はシナ事変が泥沼化し、ノモハン事変で惨敗した頃でしたから、空論に過ぎません。石原氏はシナ事変は不拡大方針を叫び、軍中枢に進言しておりますが、無視され結果的には退役、特に関東軍時代から犬猿の仲だった東條首相とは対立し、公然と「東條上等兵」と罵っております。戦後は東京裁判で起訴されましたが、途中で不起訴になり、故郷山形県鶴岡市に帰り、昭和24年に亡くなりました。享年60才 波乱万丈の生涯でした。

### イランのバスターミナル

イラン高原、海拔1300mの高原で地平線が見えるくらいの平坦な大地で、乾燥しきった不毛の大地にみえました。もし論にあるように日独がこの高原で雌雄を決する戦いをしたと仮定したら、補給面で我が陸軍は絶対的に不利で、完敗間違いなし、と独断と偏見の私見です。それは比較的平坦で鉄道、道路が完備しているヨーロッパ側からの補給路、そしてこの当時3B政策により中東には独逸の資本が根付いており、対して我が国は遙かに遠いなんら関わりのない地域であって、大山脈と砂漠の連続である路なき路をどうやって補給路を確保するのか、海軍或いは海路の補給を全く無視した陸軍軍人の発想が理解できないからです。